

オフィスにおける多機能トイレの利用実態とそのあり方 オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究 その4

正会員 ○日野 晶子 1* 岩本 健良***
同 高橋 未樹子 2** 大出 摩紀**

オフィス トイレ トランスジェンダー
LGBT 意識調査 多機能トイレ

1. 本研究の目的

本研究は、性自認に関わらず利用しやすいオフィストイレの環境整備をめざしている。前報にて、オフィスで利用したいトイレはトランスジェンダー（以下トランス）の中でもさまざまであり、一括りにはできないことを明らかにした。しかしそのさまざまな希望は、「男女別のトイレ」と「性別不問のトイレ」に大きく二分することができる。ジェンダー区分により、さらには同じジェンダーの中でも人により希望の違いはみられるものの、「性別不問のトイレ」に対して一定のニーズがあるといえる。

「性別不問のトイレ」は、公共トイレにおいては現在一般的に「多機能トイレ」のほか、コンビニなどの小規模施設にみられる独立個室型^{注1)}の「男女共用トイレ」が存在する。一方オフィスにおいては、労働安全衛生法の規則^{注2)}にて、トイレは「男性と女性に区別すること」と定められており、男女別トイレが大前提である。（性別不問の）多機能トイレを設置するケースが増えているとはいえ、建物内に1カ所しかないことも多く、現状では一般的に普及しているとはいえない。

そこで本報では、オフィスでの多機能トイレに関するストレスや利用実態を調査し、そのあり方およびこれからのオフィスにおける「性別不問のトイレ」の可能性を探る足がかりを得ることを目的とする。

2. 調査方法

その3同様、シスジェンダー（以下シス）824人（20～59歳の性年代で均等割り）およびトランス299人（FTM：Female to Male 86人、FTX：Female to X-gender 73人、MTX：Male to X-gender 54人、MTF：Male to Female 86人）に対し、インターネット調査を行った。

3. 調査結果

3-1. オフィスの多機能トイレに関するストレス・不満点

主に利用しているオフィストイレのストレス・不満点について、「多機能トイレの設置や利用」「男女別トイレの利用」「設備・機能」「環境・心理」の4つのカテゴリ全20項目を尋ねた中から、「多機能トイレの設置や利用」に関する項目を抜粋した結果を図1に示す。

「多機能トイレがない・少ない」を挙げた割合は、シ

スでは14.9%、トランスでは、シスを20ポイント近く上回る34.1%であった。さらにトランスの中でも、その3にて報告した「トイレ利用の希望と実態の一致度」により大きな開きが見られ、一致の場合は23.5%であったのに対し、不一致は50.9%と約半数にのぼった。

また、「多機能トイレを利用しにくい・利用できない」についても、シスよりもトランス、さらにトランスの中でもトイレ利用が一致よりも不一致の方が高い割合となり、顕著な差がみられた。自由回答（以下FA）にて、「多機能トイレがあっても“健常者”は利用できない雰囲気」というトランスの声もあり、オフィスでの多機能トイレの設置数が少ないことに加え、設置されている場合でも利用しにくい状況が浮き彫りとなった。

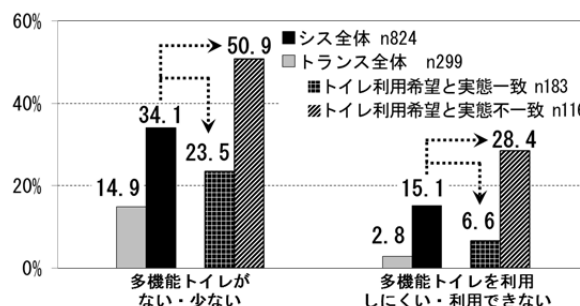


図1. オフィスの多機能トイレ：設置や利用に関するストレス・不満点

3-2. オフィスの多機能トイレを利用する度合

そこで、自身の職場がある建物内に多機能トイレが設置されている者に対し、オフィスの多機能トイレをどの程度利用しているかを尋ねた結果を図2に示す。

「日常的に利用している」と回答した割合は、シスでは13.4%、トランスでは24.3%であった。「状況によって利用することがある」の割合と合わせると、シスは44.4%、トランスは61.7%が「利用する」と回答しており、トランスはシスよりも利用度合いが高い傾向にある。

一方「利用しない」と回答した割合は、シスでは55.6%、トランスでは38.3%であり、シス・トランス共に多機能トイレの利用度合いもさまざまといえる。

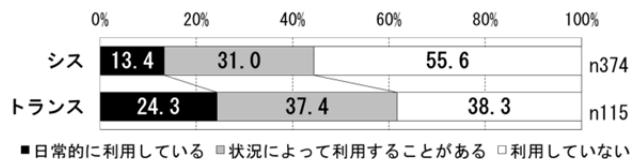


図2. オフィスの多機能トイレ：利用度合

3-3. オフィスの多機能トイレを日常的に利用する理由

前項にて、オフィスの多機能トイレを「日常的に利用している」と回答した者に対し、その理由を尋ねた結果の上位6位まで（12項目中）を図3に示す。

シスでは「広い」が最も多く、「空いている」「ゆっくりできる」が続いた。一方トランスでは「落ち着く」が最も多く、次いで「性別に関係なく利用できる」「広い」が同率であった。これらの理由を比較すると、シスは“快適性”や“利便性”を求めているのに対し、トランスは“心理的安心感”を求める傾向がみられた。しかし、上位6項目中5つが両者共通の項目であり、類似性もみられた。また、両者の理由はいずれも、「多機能トイレに付随する設備」を求めるものではなかった。

なお、「その他の理由」FAでは、MTFから「カミングアウトしていないため職場の理解が得られておらず、女性トイレが利用できない」という声もあり、望んで日常的に利用している人ばかりではないことを付記しておく。

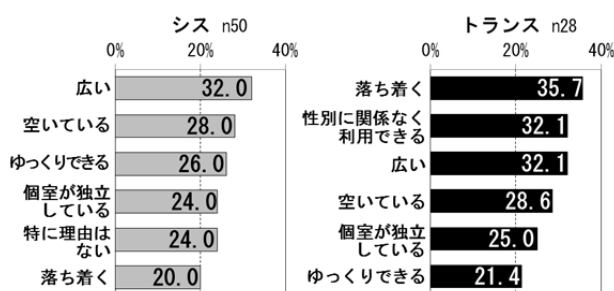


図3. オフィスの多機能トイレ：日常的利用理由(上位6位)

3-4. オフィスの多機能トイレを利用する時の状況

同様に、オフィスの多機能トイレを「状況によって利用する」と回答した者に対し、どのような状況で利用するかを尋ねた結果を図4に示す。

シス・トランス共に「一般トイレが混んでいる時」が最も多く、次いで「我慢できない時」であった。シスに比べてトランスは「その他の理由」として具体的に回答した者が多く、「周囲に人がいない時」のほか、Xジェンダーでは「性自認のゆらぎが大きい時」、FTMでは「ホルモン注射を忘れて生理がきた場合、男性トイレには汚物入れがない」というトランス特有の理由がみられた。

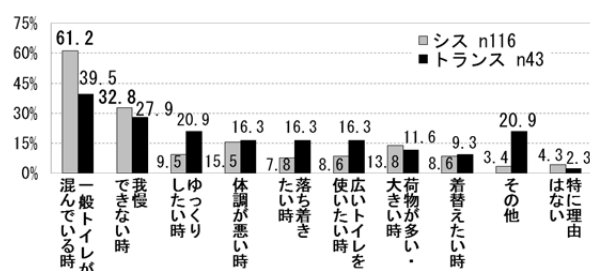


図4. オフィスの多機能トイレ：利用する時の状況

4. まとめ

調査・分析の結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) オフィスに多機能トイレがない、あるいは少ないことについて、シス・トランス共にストレスを感じている者がいるが、シスよりもトランスの方がその傾向が強い。まずはオフィスに多機能トイレを設置することが重要である。それは、障害のある者にとっても必要なことである。
- 2) 多機能トイレが設置されていても、利用しにくい、あるいは利用できない状況がある。単に設置するだけでなく、必要な人が気兼ねなく利用できるような運営や環境づくりが求められる。
- 3) トランスの中でもオフィストイレ利用の希望と実態が一致している者より不一致の者の方が、多機能トイレの設置や利用に関するストレスを感じている割合が高い。本来、利用したいトイレを利用できることは人権のひとつであり、その実現には、トランスが働きたい性別で働くことができる環境の整備が重要である。
- 4) 多機能トイレの利用度合はシスよりもトランスの方が高いが、トランスの中には日常的に利用していても、望んでそうしている訳ではない者、利用しない者もあり、「トランスジェンダーへのトイレ配慮＝多機能トイレ」と短絡的に結び付けることはできない。
- 5) オフィスの多機能トイレにおけるシス・トランス両者の日常的利用理由と利用する時の状況を統合すると、多機能トイレではない「性別に関係なく、落ち着いて利用できる、独立した個室トイレ」という潜在的ニーズが推察される。

今後、オフィスでの「男女共用の個室トイレ」の可能性を探るために、その利用意向や配置計画などについて分析を進める。

なお本報告は、「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」（金沢大学、コマニー（株）、（株）LIXIL）で行った調査をとりまとめたものである。

注1) 用足しから手洗いまで完結できる、壁で仕切られた個室トイレで、独立して設置されたもの

注2) 厚生労働省、「事務所衛生基準規則」第17条第1項1号
参考文献

- 1) 高橋末樹子・日野晶子他、「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究」（その1-2）日本建築学会学術講演会梗概集（東北），2018年9月，pp759-761
- 2) （株）LIXIL、NPO法人虹色ダイバーシティ，2016年、「性的マイノリティのトイレ問題に関するWEB調査結果」

*株式会社 LIXIL

**コマニー株式会社

***金沢大学 人文学類 准教授 文修

*LIXIL Corporation

**COMANY INC.

*** Assoc.Prof, School of Humanities, Kanazawa University, M.A